

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

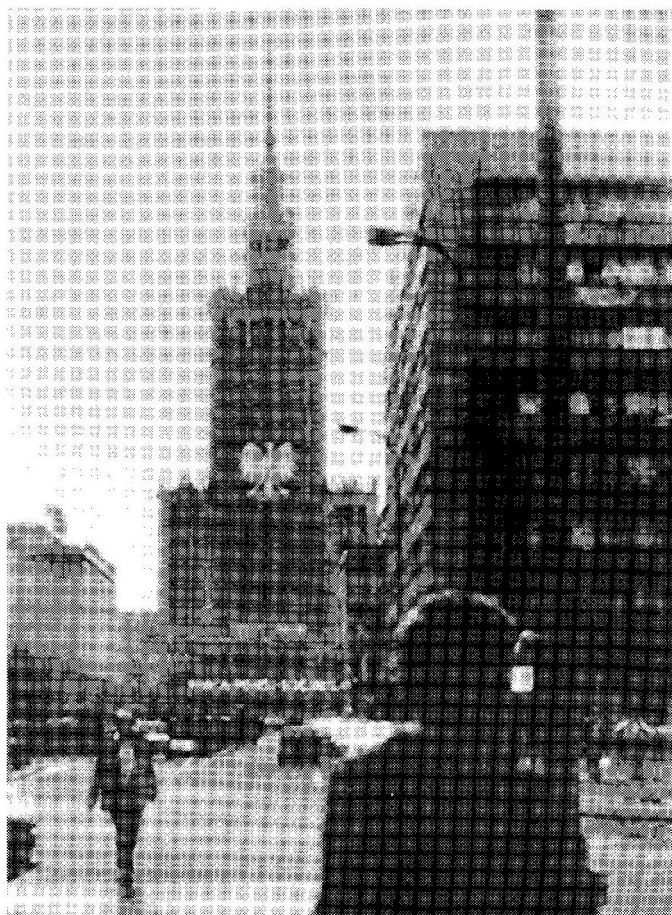
1985年

10月号

(通巻43号)

400円

# ポーランド月報



80年8月～85年8月の最重要事件は何か…3 ——「連帯」指導者に関する	『平和と自由』運動設立宣言……………18
食肉値上げ抗議ストをめぐって……………6	ENDアムステルダム大会に対する 社会抵抗委員会(KOS)のメッセージ……………19
TKK声明、7月1日以後	ポーランド現代史断章②
7月1日のあと	歴史における進歩……………20
食肉値上げ：ストにたつべきか否か	——ギエレク体制の功罪
悲観的親親主義……………10	伊東 孝之
D・ワルシャフスキ インタビュー	ポーランド料理……………22
ヨーロッパの中のポーランド……………13	ポーランド日誌……………2・23
P・ティボー	

表紙：ワルシャワの文化科学宮殿

## ポーランド日誌

1985年7月8日～8月20日

7月8日 ヤルゼルスキ首相、ユーゴスラヴィアを公式訪問。この日ヘルシンキで開かれた国連欧州経済委員会環境会議でポーランドは、亜硫酸ガス排出量削減協定に英米両国とともに署名を拒否。

7月9日 ポーランド＝ユーゴ経済協力協定が調印される。1990年までに往復貿易量を60%増に。ウルバン政府スポークスマン、7月1日の値上げ抗議ストに関する西側報道を激しく非難。「ストはどれもなかった」。

7月10日 ポーランド司教会議、徒歩巡礼に関して12カ条を発表、その中で宗教的なもの以外のスローガンや旗の類の掲示を禁止。

7月11日 イギリス労働党のニール・キノック党首、ロンドンで「連帯」在外調整局代表と会見、「連帯」に対する「強力な支持」を表明。ポーランド政府、イタリアのフィアット社と5000万ドルの借款契約を結ぶ。

7月12日 4年ぶりのポーランド＝フランス経済協力会議が閉幕。

7月13日 官製新労組の全国組織、全国「合意」労組(OPZZ)代表がワルシャワでヤルゼルスキ首相らと会谈、席上ミオドヴィチ議長は「1980年の合意を無効にするつもりはない。しかし情勢の激変によりその完全実施は不可能」と述べる。ヤルゼルスキ首相は、新組合は550万人が加盟、国内で確固たる独立した地位

を占めていると述べる。

7月15日 パリ・クラブ諸国、ポーランドとの債務繰延協定に同意。これにより1982～84年満期の113億ドルの返済が5年間据置きで11年間延長される。

7月16日 ニュツカシ財政相、昨日の債務繰延協定の成立により、新規借款の成立が期待されると述べる。同相によればポーランドは本年中に6～8億ドルの新規信用を必要としているという。この日「連帯」暫定調整委員会(TKK)が10月13日実施予定の国会選挙のボイコットを呼びかける。「ボイコットはポーランドの変革に向けた共同の決意の表明となろう」。

7月18日 国営ラジオが、TKKの国会選挙ボイコット呼びかけを非難するヤン・レム(ウルバン政府スポークスマンのペンネーム)名の論評を放送。「棄権はポーランド国家の拒否に等しい」。

7月23日 ヤルゼルスキ首相の国連総会出席が正式に発表される。

7月24日 公式発表によれば、85年上半期の工業生産高は依然目標を下回っており、輸出も不振が続いているという。他方、賃金は半年で19%以上も上昇した。

7月25日 国会で高等教育法改訂法が成立。オスマンチクら5名の議員が反対票を投じる。同じ国会で労組法も改訂され、暫定措置とされていた1工場1組合制が恒久化される。また組合の権限が強化されて自主管理評議会の骨抜きがさらに進む。

7月28日 聖スタニスワフ・コストカ教会(虐殺されたポピエウシコ神父が司祭をしていた)の「祖国のためのミサ」で集まった2万人を前に、【23頁へ続く】

# 80年8月～85年8月の最大事件は？

—「連帯」指導者に聞く—

Quel a été l'événement majeur entre août 80 et août 85? Entretien avec les leaders de Solidarność

"Solidarność, Bulletin d'Information", No. 120/121, 04. 09. 85 ("Tygodnik Mazowsze", Nr. 137, 8VIII, Nr. 138, 22VIII85)

**【編集部注】** 以下に紹介するのは、ポーランド最大の地下紙『週刊マゾフシェ』がグダンスク協定5周年にあたるこの8月、「連帯」指導者および顧問を対象に実施したアンケートに対する何人かの回答である。アンケートは、「あなたの意見では、1980年8月から1985年8月までの間に起きた最大のでき事は何でしょうか?」と問うていた。多数の回答が寄せられたが、とりあえずバリ『週刊連帯』によりながら以下の7人の声を紹介する。

クレメンス・シャニアフスキ 哲学者、論理学者、社会活動家、ワルシャワ大学教員。  
ヤヌシュ・パウビツキ 「連帯」ヴィエルコポルスカ(ポズナン)地区指導者。82年12月に逮捕されるまで「連帯」暫定調整委員会メンバー。

ヤン・リティンスキ KORメンバー、「連帯」顧問。戒厳令により逮捕されるが、仮釈放中に逃亡、現在はマゾフシェ地区地下指導部の1人。

ヘンリク・ヴェツ KORメンバーの1人、「ロボットニク」編集者、「連帯」マゾフシェ地区顧問、戒厳令と同時に逮捕、84年7月釈放。

ヤツェク・クーロン KORメンバーの1人。「連帯」顧問。戒厳令とともに逮捕され、84年7月釈放。最も有力な反対派イデオログの1人。

マレク・エデルマン 1943年ワルシャワ・ゲットー蜂起時のユダヤ人戦闘団司令部メンバー。医師。「連帯」ウッチ支部役員をつとめ、第1回全国大会に代議員として参加。

ヤツェク・フェドロヴィチ テレビ・ラジオ・舞台・映画・評論等幅広く活躍。戒厳令までマゾフシェ地区ラジオ「連帯」のライター。

成熟した国民——クレメンス・シャニアフスキ

この2つの日付の間に起きなかったことをまずはっきりさせよう。われわれが生きている体制は変化しなかった。かつてと同じく、それは暴力に依拠し、国の統治から国民すべてを排除している。これは最重要な事実である。

同時にわれわれは、逆転不可能な変化が起きたという感じを持っている。どこにか?

疑いもなく心の中にある。われわれは成熟し、幻想も不安も抱かずに未来を見る。もっと冷静に言えば、われわれは今どこにいるかを知っている。そしてこの世界を前にして受け身でないよう努め

ている。いってみればこれがすべてである。これでは足りないか、十分ではないか?

共産党神話の消滅——ヤヌシュ・パウビツキ

共産党が労働者を代表するという神話が煙と消えた。

勤労人民の利益を代表する「連帯」を得た。真の選挙を求める大衆的行動によって全体主義体制にノーと言った。

政府が国民に戦争を布告した。

「連帯」は、非合法化されたにもかかわらず、その平和的性格を維持した。

政府がテロリストであることがわかった。

教会の地位が強化された。

社会は経済と社会の動向を共産党員の活動と同一視することをやめた。

### 人民の生成——ヤン・リティンスキ

この5年間に起こったことからただひとつを選ぶのは不可能に思える。未来はぼんやりしており、明日には何かが起こって、過去に対するわれわれの認識をすっかり変えてしまうかもしれない。重要な事件のひとつひとつがすべて、等しく重要な他の事件によってただちに否定される。グダンスク協定は政府によるその不断の侵犯の前に無意味に見える。1000万の自由労組は、その非合法化後のこれほど多くの組合員の消極性を前にすれば一体何だったのか。

ひとつのことだけがこのような相対性を免れられているように思える。「人民の生成」である。

「連帯」の誕生が決定的な役割を果たしたこの人民の生成は、ポーランド人が自らの政治的・歴史的條件に関する現実主義的認識を越えるのに成功したことから始まった。

彼らは、自らの地理的、歴史的現状の宿命に抗して、いまふたたび、困難で危険に満ちた自由への道を歩みはじめた。

この過程を不可逆的と判断するのはまだ早すぎよう。しかし、現実の合理的分析に基いて、6年前ポーランド人の心の中に生じた変化（それはヨハネ・パウロ2世の最初の里帰りの時に始まったと考えるからである）は持続的なものだと考えてよい。地下活動の有効性いかん（その範囲と力について延々と議論が続くだろう）にかかわらず、ポーランドの圧倒的多数はもはや公式の思考様式には従わない。

この数年間の中心的でき事は「記憶の回復」と要約できよう。社会は現在と未来の建設のために過去を回復しようとしている。この過去の回復とそこから生じる一体感、そして人々がさまざまに異なる見解を持ちえ、ポーランド人が内外のあらゆる制約の間で格闘しているという事実の認識の拡大は、ポーランド人がいつか、今は願望であるこの大きなでき事を現実化しようと期待することを可能にする。

社会的意識の内部における共産主義の死。ポーランド人は可能となればただちに現体制を拒否するという普遍的確信。「この悪夢はいつかいつ終るのか」——すべての人が絶え間なく自問する。人々の意識内部における共産主義の死と並行して深いペシニズムが広がっている——人々は自分の運命に影響を及ぼすチャンスがあまりないと感じている。

社会と党および国家権力との共存可能性をかいま見てから5年たった。81年12月はこの希望を閉ざした。80年8月以前の状況への復帰は不可能である——この点では将軍に同意する。同じく不可能なのはグダンスク協定が定めた状況への復帰である。社会はもはや自由労組だけでは満足しないだろう。社会自らが自らの運命を決定できる永続的な政治的解決が必要である。これは今のところ不可能であるが、これ以外の道はない。われわれがいつ決定的かつ不屈の行動により現実と願望を一致させるかは、単にわれわれだけにかかっているのではない。

### 組織された社会——ヤツェク・クーロン

80年8月のわれわれの勝利はすべて煙と消えたのか？ ちがうと思う。80年8月に獲得し「連帯」合法期間中守り切ったものは、むしろ「連帯」以上に持続的である。わが国の歴史上、他の何ものとも比較にならないきわめて重要なあることが国民生活の中で起こった。われわれの社会的記憶にはただ敗北しか残っていなかった。ところが今回は、われわれは生き延び、偉大な勝利を経験している。社会が国家の枠組の外でこれほどよく組織されたことは、わが国の歴史上1度もなかった。全体主義国家を無視して組織された社会、これまでどこにそんなものがあつたか。

これはエリートが大衆と一体化したことを意味する。社会的記憶を維持するのはもはや社会の唯一の精華たる知識人ではない。それは、労働者、農民、タクシー運転手、社会の25%である。

国民の真の精神的道案内である男女の大衆が地下出版物を読み、われわれの行く先とその理由を理解しようとしている。これこそが、わが国がこ

れまで1度も手にしたことのない、そしておそらくは世界中のどの国も手にしたことのない財産である。これは、支部やテレックスその他をもった「連帯」よりも貴重である。戦車がいつでもわれわれを粉砕できることは知っている。しかし、自らの労働と自由を闘いに投じることも嫌わないこれほど立派なエリートをもった人々がいるかぎり、われわれから勝利を奪い取ることはできない。

#### 常に最強者が勝つ——マレク・エデルマン

主たるでき事は、1980年の「連帯」の誕生と政府の無能、そして戒厳令（これは最初から予見できた）であった。歴史的にはこれほどありふれたことはない。常に、最も強い者が勝利する。ナリのようにシチュエナベをガンガン打ち鳴らし、あるいはスローガンに喜ぶだけで自由が得られたためしはない。アメリカの黒人は60年代に繰返し暑い夏を白人に見舞ったからこそ権利の平等を手に入れた。ポルトガルの「カーネーションの革命」が勝利したのは、カーネーションを挿したカービン銃に実弾もまたこめられていたからである。フレサとデズモンド・ツツのノーベル平和賞は美しい理想に対して与えられた。しかしいかなる独裁も——個人のもあれ党のもあれ——美しい言辞の前に屈服することはありえない。したがって、この5年間における主たるでき事のひとつは、美しい理想はあったがいかなる力も持たなかった1000万の男女の失敗であった。

「連帯」は、無能な政府がそれにもかかわらず自らの存続を望んだために生まれた。しかし政府は、ロシアの助けを借りずに12月13日を実行できる程度には強力であった。なぜなら、いかなる権力も勝利のVサインを前にして後退することはないからである。たとえVサインが1000万あろうと、それを粉砕するには2台の戦車で十分である。

#### 素顔を見せた権力——ヤツェク・フェドロヴィチ

私は「連帯」はいつでも生れうるし、最初のチャンスに再生すると思う。それがどのような形をとるか、組合か、政党か、もっと別の形か、それはわからない。われわれは現在の体制を愛していないし、気に入ってもいない。いつも気に入らな



かったし、いつかわれわれの気に入ることも絶対ありえない。つまり、私が言いたいのは、「連帯」は潜在的につねに存在したということだ。80年8月がその表舞台への登場を可能にした。したがってこの5年間の主たるでき事は、私にとっては、「連帯」の誕生ではなく、1981年12月13日に起こったことである。

いかなる独裁もイデオロギーなしには存続できない、すなわち、いわゆる大義に対する社会の大多数（精神的破産者は問わない）の信仰とその無私な参加なしには存続できないという根本原則からすれば、12月13日の夜は、ある日に到達するほかない過程を決定的に早めたのである（重要なのはこの日が近いことだ）。この夜、イデオロギーは決定的に葬り去られた。権力はその真の素顔を現わした。その方がよい。それはうれし気に素顔をさらし続け、そうすることによって人々を真に楽しませ、結局自分自身に害を及ぼすのである。

[訳：水谷 鏡]

## 食肉値上げ抗議ストをめぐって

【編集部注】 「連帯」暫定調整委員会（TKK）は食肉価格の値上げが予定されていたこの7月1日、午前10時を期して1時間の全国ゼネストを呼びかけていた（本誌85年7月号3頁のTKK呼びかけを参照）。この値上げは、当初3月1日に実施が予定されていたが、「連帯」をはじめとする労働者の抵抗の前に一たん撤回されたのち、実施時期と値上げ幅に若干の手直しを加えて3月以降段階的に実施されてきた一連の生活必需物資値上げの総仕上げをなすものであった。TKKはこの一連の値上げが国民生活に及ぼす深刻な影響を重視し、その阻止のため最大限の闘いを組もうと試みたのである。ところが工場現場の闘いは必ずしもTKKが期待したほどの盛り上がりを示さず、7月1日の全国1時間ゼネストは事実上不発に終わった。この経過は、82年11月10日のゼネスト不発と同様、今後の「連帯」の運動に大きな影響をもたらすことが予想される。〔訳：水谷 駿〕

### TKK声明：7月1日以後

Statement of the TKK, 16 July 1985  
Uncensored Poland News Bulletin, No. 17/85, 29 Aug 1985

生活水準の引き続く低下に対し組合が提起した最近の抗議行動は大成功を収められなかった。力試しに立ち上がったのは、主としてヴロツワフの諸工場、グダンスクのいくつかの重要な工場（造船所と港湾）、ワルシャワ（ポルコロール、ウルスス、ワルシャワ鉄鋼所）とスウブスク（農機工場と地方公共ビル）の1部であった。全国レベルでは数十工場に満たなかった。したがって1時間ストの呼びかけに大衆が反応しなかったと言うのは正しい。しかし組合の敗北を語るのは間違いである。

生活水準防衛のための「連帯」の攻勢は年初以来続いてきた。そこには個々の工場における多数のストライキ、ストの脅し、抗議行動、ピラマキ活動などが含まれる。こうした行動によって政府は、値上げの範囲と幅の限定化、その段階的实施、配給制度の部分的廃止を強制された。これは、社会的抵抗も組合の圧力もない条件の下で実施された1982年と1984年の値上げとは対照的である。

われわれはまだ恒久的かつ公正な生計費補助を獲得できないでいるが、労働者の多くが賃上げの獲得に成功しており、場合によっては当局が当初

提案した以上の補償を獲得している。しかしこれが可能となったのは、労働者が強力によく組織されているところか、当局が懐柔に最も意を用いた労働者グループの場合だけである。このような結果は、非力な労働者グループをますます窮乏化させ、組合にとって十分満足すべきものではない。それゆえに、公正な賃上げが達成されていないところで圧力をかけ続けることがわれわれの義務である。

この6ヵ月間の重要な特徴は多くの職場で明らかになったように、恐怖と無力感の障壁が乗り越えられつつあることである。ありとあらゆる報復措置にもかかわらず、特定の要求をかけた効果的な地方的ストライキが可能であることが証明された。ストの脅しをかけられる労働者はすべてそれなりの成果をあげよう。

われわれの闘いを一層効果的なものとするために、失敗と成功の両方の慎重な検討が必要である。その際、どちらかという目立たない首尾一貫した日々の組合活動こそが、劇的な全般的勝利のためのカギであることを忘れてはならない。

1985年7月16日

独立自治労組「連帯」暫定調整委員会

ボグダン・ボルセヴィチ(グダンスク)

ズビグニェフ・ブヤク(マゾフシエ)

マレク・ムシンスキ(下シロンスク)

クラクフ、ウッチ、上シロンスク各代表



## 7月1日のあと ——『週刊マゾフシエ』編集部

After 1 July, by "Tygodnik Mazowsze"

Uncensored Poland News Bulletin, No. 16/85, 8 Aug. 1985

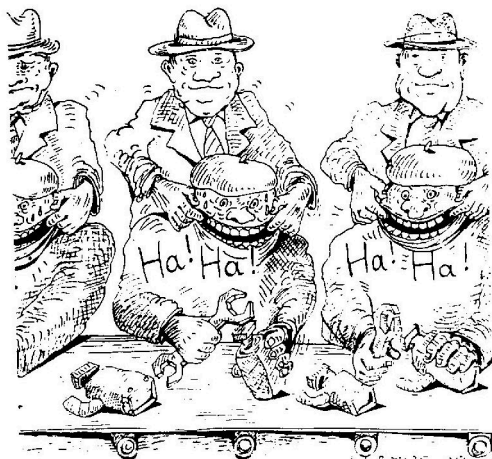
7月1日の値上げ反対ストはほとんど実行されなかった。ヴロツワフやワルシャワ、グダンスクの主要拠点のいくつかでは労働が停止された。これはT K Kの権威に対する忠誠の象徴的サインであった。労働が停止されたのは、ヴロツワフではドルメル(労働者の65~70%)、エルヴロ(工具部門)、ポラル(旧部門)、アグロメト・ピルメト(70%)、ハイドラル、スベルフォスファト、ポリファルブ、ウルススのいくつかの部局(工具部門全部とライセンス部門の大半)、ワルシャワ製鉄所では最大のW-45部のほぼ全体が1時間あたり作業を中断し、W-48ではローラーが35分間ストップした。他の部門では悪臭ガスが充満したため労働者は1~4時間持場を離れた(この問題は検察庁が調査中である)。ポルコロールでは工具部門の3つの班が賃上げと超過勤務賃金率の引上げを求めて作業を中断した。ワルシャワのラヴァル工場の労働者は、最初午前10時の休憩時間を1時間に延長して抗議の声を上げ、その後約60%が参加して事実上のストとなった。工具部およびP R - 2では参加率をもっと高かった。グダンスク造船所では、一部の推計によれば80%が事実上のストに加わった。午前10時、作業の監視がなくなり、ほとんど誰も仕事をしなかった(誰の目にも明らかな原材料不足のために)が、経営陣によればストはなかったという。スウブスクの農機工場ではW-3部の数10人が1時間労働を止めた。5人——いづれも戒厳令下で有罪の経験があったが労働法第32条に基き解雇され、1人が略式裁判で禁閉1年の判決を受けた。

とりわけ月初めに顕著な原材料不足のため、一

部工場では「連帯」工場細胞でさえはたしてストが実施されたのか否か判断がつかなかった。たとえば、ワルシャワのワリンスキ工場では生産はすでに数日間にわたってとまったままだった。経営陣の一部はどんな危険も避けようとした。シェドルツェのF S O乗用車工場では、6月29日土曜日に行われる予定だった定期検査が7月1日月曜日に延期され、ヴロツワフではW-5部の労働者が何の理由も告げられないまま帰宅させられた。

ストライキ以外の形態の抗議行動で最も多かったのはピラマキである。これは7月1日以前にさえきわめて広範に行われた。ウルススは81年12月以前に「連帯」幹部会員に選出された6名が連名により経営陣に3000ズウォティの賃上げを要求した。ワルシャワのモストスタルとエネルギーエクトでは従業員が午前10時から完全な沈黙態勢をとった。

当局側はありとあらゆる手段を動員して威嚇にでた。解雇の脅し、予防拘禁、身体検査の強化、職場への警官の増派、刑法強化に関する当局側の度重なる説明、等々。シフィドニクのW S K通信機工場ではまさに喜劇的狀況が現出した。多数のZ O M O(警察機動隊)と職長が作業台の間を巡回し、一瞬でも仕事の手を休める労働者の名前を書き留めようとした。ヴロツワフではZ O M Oが川の船着場とヴロザメト工場を包圍し、労働停止の試みはまったく成功の見込みがなかった。より安全な非常手段に訴えた労働者もいた。ノバフタのレーニン製鉄所では、当然支給されるべき特製スープが支給されなかったことを口実に3日後の7月4日にストに入った(経営陣はただちにスー



たのしい労働

ブを支給しなければならなかった。ローザ・ルクセンブルク工場では、P-1の5人の婦人労働者がストをすれば解雇だと脅されたため、7月1日、婦人労働者たちはブラウスの胸にVサインを縫いつけて職場に現れ、脅しを受けた5人に花束を手渡した。明らかに彼女たちはムチとともに与えられたニンジンのことを考えたのである。ストがなければボーナスが約束されていた。同じようなニンジンは他の工場でも与えられた。たとえば、4月に大幅賃上げが認められたばかりのカサブシャク工場では8月に賃上げが行われた。

\* \* \*

一般論としてこの7月1日ストは、TKKによる2月の15分スト呼びかけによって始まった数次の抗議行動のひとつの要素として、この6ヵ月間全体の脈絡の下で評価されなければならない。スト呼びかけは正しい決定であった。労働者の生活水準の防衛は組合指導部の義務だからである。成果は多くはあげられなかった。しかしこの6ヵ月間の「連帯」の活動は決して無益ではなかった。ストライキの脅しとそれによる賃上げ要求の圧力がある程度まで労働者に利したことは明らかである。ストの脅しを考慮して当局は値上げ幅をわず

かながら圧縮し、値上げ時期を多少延期した。大衆動員がなかったならば、年始めに一举に大幅な値上げが実施されていたはずである。

加えて、多くの労働者が賃上げを獲得できた。この6ヵ月間の賃上げ率は全体として計画の3倍に達した。『トリプナ・ルド』によれば、年間の計画賃上率は12%だった。ところが実際には、最初の5ヵ月で18%の賃上げが行われた。賃上率が最も高かったのは、労働者が最もよく組織されていて決意の固い所だった。とくにローザ・ルクセンブルク工場とステラ工場である。7月1日にストに入ったボルコロルの工具部では、月最低4000ズウォティの賃上げが約束された。

抗議行動はまた、単に値上げ問題についてのみならず、労働者を活性化させる効果をもった。労働者たちは新しいアイデアを探し求め、現実的に何ができるかを知った。恐怖の障壁は押し下げられた。ストが可能であることが証明され、断固たる抵抗が無益でないことが示された。国会選挙を目前に控えた今、値上げ補償の要求はかつてなく成功の可能性が大きくなっている。当局は職場における紛争は避けようとしており、その分だけ圧力に弱くなっている。このような状況の下では得られるものは多い。



## 食肉値上げ：ストにたつべきか否か ——「週刊マゾフシエ」論文

Meat Price Rise: To Strike or Not To Strike? ("Tygodnik Mazowsze", No. 135)  
Uncensored Poland News Bulletin, No. 14/85, 4 July 1985

この数年間地下活動で不断の危険を引き受けてきた組合活動家の多くが「食肉のため」のストで危険を冒すことをちゅうちよしている。いかなるストも危険を伴わずに勝利することはありえない。まず最初に情勢を見極める必要がある。近年における最も重要なこのストライキ、組合にとっては「のるかそるか」のこれは、十分に準備されるべきである。それは、一服のための休憩や売店の品揃えの多少の改善を求めた「安全運転」ストではありえない。それは、ストと称する労働者の匿名のショーに終ってはならない。危険を冒さなければならない。ストライキ委員会を（たとえ秘密裡にせよ）結成し、要求を準備するといった危険を冒す用意のある人々を見出さねばならない。200人の労働者中180人がストに入れば、誰1人解雇されないだろう。だがストに入るのが20人だとすれば、良い結果は期待できない。

今はこのような危険を冒すべき時だろうか？

おそらくそうだろう。食肉値上げには人々は常に反対だからだけではない。飢餓と永久的な栄養不良の亡霊のゆえにだけではない。賃金が貧しい生計費をほとんどまかないえないためだけではない。現在沈黙することは、永遠に、あるいは相当長期にわたって沈黙することになるからだ。貧困に対して、共産主義者が経済を管理するでたらめなやり方に対して、われわれすべてを獄につなぐことのできる刑法に対して、加入したくない官製労組に全面的依存（手当や生活条件、昇進などの問題について）を強いる新労組法に対して、われわれは1個の社会として自衛しなければならない。われわれは自分の組合を持っており、「連帯」は生きているのだ。今、危険を冒さなければならないのは以上による——やがて手遅れとなる。きわめて困難で、有効な圧力が高まらないわれわれの抵抗は、情性に、沈黙の無力感に、従順さにかわるかもしれない。だが要するに、数年にわたるこの長い抵抗はそれ自体のために続けられているのではない。そこから何かが生じなければならない

い。そしてそれが今であるべきなのだ。

暫定工場委員会の疑念はすべて理解できる。人間の恐れ、危険を冒すことの恐れは理解できる。だがまず理解せねばならないのは、危険が現に存在していることだ。つまりところわれわれはその活動のために投獄の危険をすでに冒している。大衆的抗議行動にあっては全員を投獄するなど不可能だ。では次の危険は？ 見るところわれわれが最も恐れているのは職を失うことである。共産主義体制の下でわれわれは長年にわたり終身雇用保障に慣れてしまっている。これはわれわれの奴隷化を狙ったもうひとつのわなではないのか。われわれは自分の腕がつかねに有能で、また別の職を与えてくれることをつい忘れてちである。スト参加のゆえに多くの人が解雇されて必ず生じる労働力移動の増大という条件の下ではとくにそうなのである。おそらく、自分の職のことはあまり恐れるべきではないのだ。それに問題は結局は一時的なものである。家族のことは？ 困難な時期にわれわれをほっておかない労働者の自助やスト基金、人間的連帯などにもう少し信を置くべきであろう。

危険は大きい。しかし危険を冒さずには何も獲得できない。犠牲なしに損失さえも蒙ることなく闘いに勝てるなどと無邪気に考えてはならない。損失を蒙る危険はわれわれの連帯の試金石である。われわれの未来すべてがかかっている。ほかに選択の余地はない。あきらめるか、危険を冒すか。



# 楽観的悲観主義

—ダヴィッド・ワルシャフスキ(インタビュー)—

"I am an Optimistic Pessimist," Interview with Dawid Warszawski  
"Uncensored Poland News Bulletin", No. 14 /85, 4 July 1985, pp. 40-42 (Przegląd Wia-  
domości Agencyjnych, No. 17, 26 May 1985)

【編集部より】 ポーランドの地下出版界で活躍する論客の中でも特に名高いひとりが、地下誌『KOS』を中心に筆をふるうダヴィッド・ワルシャフスキである。その論文は本誌でも何度か掲載した(第14号「独立社会の理念」、84年6月号「譲歩の報酬」、85年3月号「ソ連諸民族との連帯を」、85年7月号「よみがえる『連帯』」)。今回はそのワルシャフスキに対し、別の地下誌『ニュース展望』がおこなったインタビューを紹介する。インタビュー冒頭にもあるとおり、ダヴィッド・ワルシャフスキという名はペンネームであり、本名は明らかにされていない。また、ワルシャフスキが副編集長を務める『KOS』誌は、『週刊マゾフシェ』と並ぶ2大地下出版物のひとつであり、『週刊マゾフシェ』がどちらかといえば「連帯」暫定調整委員会(TKK)寄りなのに対し、より独立した主張を展開している。

— ある人たちはあなたにプラトコフスキのように本名で書いてほしいと思っているのだが。

戦前〔戒厳令以前〕私は政治ジャーナリズムには属していなかった。ある人間が本名で書くことに意味があるのは彼が「名のある」人間である場合に限られる。それに、戒厳令後に書き始めた以上、それを自分の名を挙げるチャンスに利用すべきではない。もっともこれは私が本名で書かないことの消極的な理由だが、名前には責任が伴う。ペンネームは、書いたことに対する責任を逃がれさせてくれる。公正さを保つために私は、本名で書く時と同じように書こうと努めている。とは言っても、無責任な考えや意見になりやすい危険には気づいている。

—あなたが寄稿している出版元についてだが、あなたの思い通りになるのか? それとも、あなたの書くものが合わないような既定の路線を持つ出版元も多いのか?

それはいろいろだ。私はおもに、私自身が副編集長をしている『KOS』から出しているが、ここでははっきりと制限をうける。それはおもに政治的な性格についてだ。私自身は明確な、主として左寄りの視点を持っている。それに対して『KOS』は、いかなる政治的伝統に同意することも

好まない。『KOS』の希望は自立した意見を具体的に代表することなのだ。この出版元にとっては、おそらく私はいちばん有名な寄稿家だろうから、読者はしばしば私の立場と『KOS』の立場を同一視する。そのため、私の論文もいくつかは(『KOS』の意図に合わないものも私は書くので)『KOS』では出せない。主題についても制限はある。私の本当の興味の対象は国際関係にあるのだが、『KOS』はそれを付随的なものとしか扱ってくれない。こことは別に、『週刊マゾフシェ』がタイプ用紙2枚分ほどのコラムを不定期に提供してくれている。

—『ポビエウシコ出版』のパンフレットが送られて来たが、その中で『KOS』が批判されている。特にあなたの書いたものがカトリックの側と衝突する危険な左翼的傾向を持っているというのだが。これはとりたてて特殊な例でなく、教会から独立した立場をとれば、グレンプ枢機卿や法王庁を批判しなくとも、いつだって激しい敵意にさらされる。これはわれわれ反対派の聖職者性の証しになりうるのだろうか?

あまり光栄とは思えないが。そうした攻撃の出所は教会に近い立場のグループ、つまり、教会の教義を反映した観点を代表するグループだ。われ



われ以外のグループはこの問題に対してかなり慎重になっているが、それはなにも教会の立場の押しつけが功を奏しているからではなく、今のところわが国の国民生活において重要な役割を担っている組織は守りたいという願いのあらわれなのだ。それは、もし教会が人びとの社会的利害に対して口をつぐんでしまったら、という不安のあらわれでもあるだろう。枢機卿やそのほかの高位聖職者たちの一部が時々嘆かわしい発言をいくつかしたとしても、私は教会には沈黙してほしくない。教会はわれわれの社会から離れた存在だ。このことは、しかし、教会を社会的責任から免除するものではない。教会が社会の期待と価値観から離れることをいつでも許すものではないのだ。われわれはいつも教会に義理立てするわけではない。

— 教会の本来の役割と「連帯」の立場が相反しているのは事実で、このことから何か誤解の生じるおそれがあるのでは？ 教会は独立した唯一の勢力として権力から理解されているのだから、必然的に政治に巻き込まれて危ない橋も渡り、重大な結果を後に残すことにもなる。それに対して、参加の機会を奪われた反対派は昔ながらの教会の役割という価値観で現実に裁

断を下す。

確かにそれはある。ひどくこみ入った問題だ。今では教会だけが、厳密な意味で、政治的役割を演じられる。反対派の政治的弱点はそれを道義的視点でのみ抱えてしまうことにある。この弱点の克服だけが政治的力の回復を可能にする。しかし、それは必然的にわれわれの陣営内に意見の多極化とぶつかり合いを招く。そうになると、教会と反対派のいくつかの組織とが衝突を起こすのは、たとえその衝突が純粋に政治的なものとしても、不可避になるだろう。教会を本来の宗教団体として考えれば、それは信者の共同体にすぎない。信者をひとつの組織体として代表するのが教会だ。だから教会はその権限においてひとつの意見を表明できる。私はこの共同体の一員ではないので、教会に対する私の意見が、ことが宗教問題に関わる場合は特に、的を外しているのではないかとしじゅう気になっている。

— もっと一般的な問題をとりあげよう。ピトブルグの事件が多くの人びとを興奮させている。あなたの考えでは、西ドイツが政治の分野において自分の経済的成功を利用できる有利さはポーランドにとって脅威になるだろうか？ 連邦

共和国〔西ドイツ〕は国境承認の考えを、憲法を引き合いに出してはっきり否定しているが。

ドイツの統一問題がポーランドの利益にとって重大な脅威であるというのは客観的な事実だ。憲法はそれに対してさしたる障害にはならない。「中和」するか、それとも正面から立ち向かうか、どちらの選択もできるが、ドイツの統一に対して条件を押しつける力が独立ポーランドにあるとは、私には想像もできない。共通利害の領域を見出して脅威を「中和」するのも政治的には賢明なやり方だろう。この問題はまた、いわゆる民族自決権の不可侵性によって道義的にも主張できる。つまり、統一へのドイツ人の願いは道義的にも正しく、政治的にもかれらの方に分があるということになる。しかしその願いを受け入れるにはかれらがわが国との国境線を明確に承認することを条件とすべきだ。統一ドイツ政府がこの点をあいまいなまま残すことは許されない。だから、コール首相の現在の政策は共通の政治的利益に対する重大な脅威になると考えられる。

——たぶんそれは、少なくともリトアニアやウクライナ、白ロシアとの東部国境をポーランドが明確に承認せざるをえなくなる先例となるだろう。

私にはその2つに違いがあるとは思えない。しかし、それぞれがそれぞれの立場で主張することを私は支持する。これは、われわれの隣人たちとしかるべく付き合うための政治状況の前段階なのだ。実例を挙げよう——『KOS』が接触を持っているリトアニア人亡命者サークルとの討論の時だった、かれらがヤルタ体制支持の立場にあるのがわかったのだ。ヤルタ体制をかれらはリトアニア西部国境の保障と考えている。かれらがヤルタ協定の政治的取り決めの修正に反対して、アメリカの政治サークルと一緒にやって行った抗議を撤回させるには、かれらの国境問題についての主張を受け入れることが必須条件だった。東部国境地帯との歴史的つながりのすべてにもかかわらず、ポーランドの世論は現在の国境線を受け入れなければならない。実際、問題になっているのは大体こういうことだと思う。

——東欧の亡命者サークルとも自主出版誌上で



討論するのか？

する、ただ、かれらはいへん慎重だが。それを可能にしているのは在外「連帯」の出版物のおかげだ。

——われわれの雑誌についてどう思うか？ ある特定の路線を追求しないという折衷主義には反対だろうか？

あなた方の雑誌は好きだし、あるべきジャーナリズムの姿勢で「新しい地下出版」を代表しているという点で重要な存在だと思う。つまり、重要な事実の簡潔な取りあげ方と全般に高度なジャーナリズムの基準のことを私は言っている。『ニュース展望』誌は、ありがたいことに、公的機関ではない。決してそうならないよう希望する。いまや折衷主義には価値がある。

——自立したジャーナリストとしてあなたは自主出版に何を期待するか？

私は楽観主義的悲観主義者だ。この先より良くなるようには見えない、だからわれわれは活動を継続すべきなのだ。"Practice makes perfect" [習うより慣れよ] というわけだ。

[訳：篠崎 誠一]

# ヨーロッパの中のポーランド

ポール・ティボー

Polska w Europie Paul Thibaud  
"Kontakt" No. 5/85, Paris

【編集部より】ポーランド人は西欧諸国のうちでもとりわけフランスに親近感を抱いているように見える。かつてプロイセン、ロシア、オーストリアに分割された亡国のポーランド人は、祖国再建の夢をかけてナポレオン軍に加わり、日ざましい活躍をした。今もパリには亡命ポーランド知識人が多く住み、ポーランド語の雑誌を発行もしている。しかしポーランドがフランスを愛しているほどにフランスはポーランドを愛しているのか？ フランス人の書いたひとつのポーランド観を以下に訳出する。著者ポール・ティボーはフランスの月刊誌『エスプリ』の編集長。面白いのは、ポーランド人が一般に「ヨーロッパ」というときは東西両ヨーロッパを含めて考えているのに対し、フランス人ティボーにとっての「ヨーロッパ」はまず第一義的には西ヨーロッパだけを意味しているらしいことである。また、西欧主導型の東欧変革を説いている点など、西欧的自己中心主義ともいえるが、西欧の意識の一例として興味深いのではなからうか。なお、この論文はパリ刊のポーランド語雑誌『コンタクト』に掲載されたもので、ポーランド語からの重訳である。

西ヨーロッパの国々にとってポーランドは近くて遠い国である。ポーランド人が文化的に、とりわけ政治文化において、西欧に属することからいえば、ポーランドは近い。そして地理的位置がポーランドの西欧諸国民の織りなすゲームへの参加を——過去のほとんどの時期と同様に——不可能たらしめていることからすれば、ポーランドは遠い。ポーランドは列強支配のヨーロッパに属している。一方、西欧を特徴づけるのは諸国民の多重的協力である。かつて列強支配のヨーロッパにあって、ポーランド人は支配体制に異議を唱え続けた唯一の民族であった。ポーランドをとりまく列強は、国王選挙への干渉といった間接的手段やポーランド分割のような極めて野蛮な手段を用いて、ポーランド民族を押しつけようとした。これらの列強（ドイツ、オーストリア、トルコ、ロシア）はどこも、ポーランドを自国の多民族国家構造に組み込むことはしなかった。ポーランドはあまりに大きくあまりに不服従的であった。しかし、ポーランドの拒絶と抵抗も16世紀のドイツとロシアの勢力の伸展を妨げはせず、この2国はのちにポーランド国を地図から消し去る。独立の回復には奇跡が、1918年の予想もできない偶然の一致が必要だった。つまり、両大国の時を同じくしての一

時的崩壊である。

かつて他民族を統合する中心をなし、栄華と衰退の時期を経た小さからぬ民族たるポーランド人は、決していかなる帝国の一部とも白国をみなしたことはなかった。これと似た拒絶、つまりフランス国王を王国の支配者と宣言し、それにまさる俗世の権威を認めないという、少なくとも12世紀以来続いたフランス人の姿勢が、（フランス帝国主義を生み出したが）西ヨーロッパの基礎のひとつをなしていることはよく知られている。自らの国を持ちたい、「完全な権利を有する」民族になりたいというポーランド民族の要求は、中・東欧には珍しい例である。チェコ人やハンガリー人などが、ドイツ帝国、オーストリア帝国への所属を誇った一時期があったとはいえ、他は「国家なき」諸民族——スロヴァキア人、スロヴェニア人、クロアチア人、ウクライナ人など——であった。ただセルビア人だけはポーランド人同様にオーストリア—ハンガリー帝国に対してもトルコに対しても抵抗した。

この地理的所屬と政治的意識のギャップから、ポーランドは昔から中・東欧における西欧的価値観の証人、スポークスマンの役割を担ってきた。「証人」にあたるギリシャ語には「受難者」の意

味がある。これは昔からよく言われる「ポーランド＝諸民族のメシア」というモチーフを思いおこさせる。この危険なモチーフは今も生きている。それを論難する前に、そこに含まれる意味を考える価値はあろう。

西側、とくにフランスのポーランドに対する最も固定化した姿勢は、「無力な同情」である。「フランスは速すぎる」——ポーランド分割〔18世紀末〕に際してはこう言われた。100年の後、「ワルシャワは秩序が支配している」と述べたセバスチャンに対し、フランスの風刺画家は怒りをあらわにした。つぎの50年が過ぎたとき、フランス急進政党のある代議士はツァーリの目前で「閣下、どうかポーランドを生かしてやって下さい」と言ったが、それにもかかわらず露仏同盟は結ばれた。しめくくりは1981年12月13日〔戒厳令導入日〕。フランスはどう対応するつもりかと問われてクロード・シェイソン外相は「むろん、何もしない」と答えた。この結果世論が再びポーランドの抑圧者と西側諸国政府のシニシズムに反対して結集することになった。ただこのとき、ある違いが存在した。今回ポーランドを抑圧したのはロシアというよりは共産主義イデオロギーであり、言ってみればフランスやイタリアにとって縁のないものではなかったのだ。東西を問わずすべてのヨーロッパ人にとってそれぞれなりに共通の問題であった共産主義が、ついに西側のポーランドびいきを客観的に根拠づけた。かつての、中欧の強国（ベルリン、ウィーン）に対抗するための伝統的なフランスの東方同盟政策（ロシア、トルコとの3度の同盟）は、ソ連に対しては成功しなかった。ソ連体制の明白な硬直性は、1968年以後、1956年〔ハンガリー事件〕で形作られていたフランスの意識をさらに深化させた。ジスカールデスタンが敗れたのは何よりもワルシャワでブレジネフと会う決定を下したためであり、この時、選挙民の大部分が「東方開放策」を巧妙な政策でなく憶病とみなしていることが明らかになったのである。

ポーランドの不幸な地理的位置は、ポーランド人によく見られる不公平感と、文化が本来の文化的土壌から引き離されているという感情の源となっている。私が考えているのは「頭脳流出」——その中にはマリー・キュリーやジョセフ・コンラッド（コジェニョフスキ）など有名な名もある—



一だけではない。長年月にわたって見れば、ポーランド文化全体が国外へ移されたということもできる。1830年の貴族たちの亡命は、民族的価値の大きな部分の移動をともなった。ショパンの音楽同様にポーランド詩の最大の業績はパリやローマで生み出された。ポーランド人に絶大な評価を受けるゴンプロヴィチは40年間を外国で暮らし、チェスワフ・ミウオシュはカリフォルニアの大学で教え、コワコフスキはイギリスで教え、ポーランドの最も重要な月刊誌は「パリ版クルトゥラ」と呼ばれている。ポーランド文化は他のどの文化にも増して、祖国と切り離されている。離散した知識人の成功は、国内にとって誇りであると同時に苦汁でもある。ワルシャワの文化生活の重要な担い手の多くが、ワルシャワに不在ということは普通である。彼らは短期や長期、国外に出かけてゆく。優れた人々が多かれ少なかれ自由意志で移住してゆくことは、ポーランド文化存続の方法であると同時に、隠れた傷でもある。ワイダ監督の映画『ザ・コンダクター』がこのテーマについての根本的な台詞を示している——「ポーランドの真の再生の時は、ポーランド最良の息子、つまり移民たちが戻って来たときだ」。

つまりポーランドは、内へ、自らへ向かう民族でありながら外へ、とりわけ西欧へ向かって生き

てゆく民族である。このことはしかし、ポーランドの大西洋岸諸国との関係が協動的であるという意味ではない。むしろ逆で、ポーランドは「諸民族のヨーロッパ」の一部をなしてはいない。諸民族のヨーロッパの方を向きながら、取り返しのつかぬほどそこと切り離され、受難者の役を演ずべき舞台の上に立っている。ポーランドが西側にモラル上のプレッシャーをかけること、自力で達成可能な目標を念頭におかず、他の国々に助けを強いるような行動をとる傾向のあること、これが西側に良心の苛責をもたらす。助けを与えなければ、敗北の責任を負うことになる。ワルシャワ蜂起の開始決定についての分析では、AK〔国内軍〕の蜂起開始の決定にあたり、「彼ら〔連合軍〕はわれわれを援助せざるを得ないだろう、チャーチルはわれわれを見捨てることはできない」との論拠が繰り返し言われた。これは当時のチャーチルの政策への完全な無理解を示している。蜂起決定が下された際の外部世界からの孤立状況はヤン・ノヴァクが書いている。だが、その無理解がただ当時の状況、困難な通信事情やロンドン亡命政権内の決定だけから生じたとは断定できない。もしかしたら蜂起はある選択を反映していたかもしれない。結果はどうあれ世界の面前でポーランドの役割を演じる、最終的にはヨーロッパ政治体制の一部としてではなく、その犠牲が他民族を恥じ入らず「証人」の民族として振舞う、という選択を。ただ、その場合に、連合国側の意図を知る必要をなぜ感じたのか？ モラル上の権利を体現する者はそうした問題に考え込んだりはしない。

同じ理由から、ポーランドの民族主義は他の東欧諸民族の民族主義とは別の病いに冒されているようにみえる。他の東欧の民族主義にとって危険な点は、一般的に、強國に圧迫された時それに乘じて隣國に奪われた記憶と怨恨とで閉鎖的になることである。こうして一部のハンガリー人はトリアノンとの、チェコ人はミュンヘンとの条約の記憶から、逃れられずにいる。こうした小民族のショービニズムは弾圧の犠牲という偉大な役割と結びついているポーランド人にはそれほど縁がない。他民族に例を示す役を自ら引き受けることは、同時にポーランド人を盲目化させ、J・J・リプスキの批判した「ポーランド的なすべてのものへの愛」を生むともなり得る。この態度は、時々われこそはヒトラーの最大の犠牲者だとポーランド人がしつようにユダヤ人と争うときに（フランスのテレビでこの問題では何度か不愉快な衝突があった）現われる。

戦後のポーランドがこの態度を改めようと大きな努力をしたことは注目に値する。たとえばミウオシユが「権力の獲得」の中でおこなった、民衆の血を無駄に流させた右翼民族主義者への批判を思いおこしてみよ。そして何よりも、ポーランド人がドイツ人におこなった不当行為を認めた、ポーランド司教会議の精神的・政治的に極めて重要な姿勢を思いおこしてみよ。これは、ポーランドがただ他国の作った歴史の犠牲者であるだけではなく、ポーランドにも責任と罪があることを思い出させた。また、ヴィシンスキ枢機卿を中心にポーランドの「自由への道」を捜してきた人々の、



30年以上にわたる政治戦略が、あらゆるロマン主義的ナルシズムから脱却していることも明らかである。教会の戦略はもはや西側への援助要請アピールに頼らず、当面達成できることは何かを見きわめ、その達成にむけ努力することを骨子としている。西側への幻滅が行動意欲の減退を招き、体制の受け入れを促進させたチェコスロヴァキアとは違って、ポーランドでは西への幻滅がポーランド人の政治意識の成長を促したようにみえる。ヨーロッパ民族の定義を、戦争と競争と交換と協力を通じて隣国とのつきあいを、つまり可能性の限界内で他国の中に自らの位置を見つけたすことを、学んだ民族のことだとすれば、逆説的な言い方だが、ポーランド人はヨーロッパに頼ることをやめたときにヨーロッパ人になったとすら言えよう。政治的に「ヨーロッパの」民族になるということは、疑いなく「隣国とのつきあい」、自己の地理的範囲の受容の能力を持つことを意味する。

ポーランド人法王ヨハネ・パウロ2世の選出は、ポーランドの孤立に終止符を打ち、ポーランド民族全体を巨大な影響力を持つ世界的構造と結びつけることで、こうしたポーランド人の成長過程に成熟をもたらした。

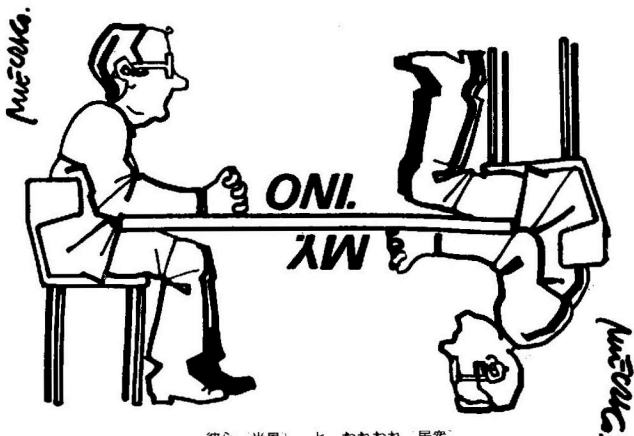
だがそれにもかかわらず、ポーランドがヨーロッパといわれる民族集団に入ったとはいえない。第1に、経済的にポーランドはソビエト超帝国の陣内にある。第2に、「連帯」の創設という大きな成功が、ポーランド人に自己の運命に関する発言を可能にさせる政治的過程へと進んでいかなかった。それは共産党政権とその後見者たちが頑として交渉に応じなかったため、「連帯」の自己定義、アイデンティティーの主張が明確になってゆかなかったということなのか。「連帯」の象徴的もしくは儀式的な役割（派手な記念日や荘厳な葬儀などを見よ）が、組合としての、また政治的な役割より上位に立ったということではないのか？ このような「連帯」の役割の変化の中には、組合の創設者たちがあれほど克服しようとしたあの伝統的、ロマン主義的姿勢への逆戻りを見ることができ。西側にモラル上のプレッシャーをかける傾向が消えるほどに、再びモラル上の声明や象徴としての役割で満足する傾向が現われた。この傾向は、単なる一定の集団心理の所産ではなく、何よりも事実から生み出されたものだった。ポー

ランド人は、自ら甘んじて受け入れることも、自らの手で廃絶することもできない従属状態におかれると、ロマン主義をもって反応する。歴史的無力状況の中、唯一反ロマン主義的なものといえば、敗北主義的現実主義のつとる「体制協力者」の態度だけである。現在、多くのものごとがポーランドにおける政治的ロマン主義への回帰を示している。ポピエウシコ神父殺害は、民衆の意識の中に受難者のモチーフを呼び戻した。体制との対話を拒絶するアダム・ミフニクの姿勢も、伝統的政治文化の最も辛辣な批判者たちにまでこの変化が及んだことを証明している。

それではこれは、政治的ロマン主義批判から論を始めたこの論文が、ロマン主義は避けられない、根拠あるものだと結論に達したことを意味するのか？ いや、全くそうではない。それぞれの時期の違いを認識しよう。将来の直接的展望がない状況下では、基礎に立ちかえり、基盤を確認することが未来を救う唯一の手段である。ことが始まった時、それらは違った形で見えてくる。その時は自己の殻から出て、他の何人かの役者を相手の「ゲーム」に加わらねばならない。はたして「連帯」の時期、ポーランド人はそれを満足すべきレベルまで行い得たのだろうか？ 私の思うに、組合の内部問題を刺激することを望まなかったために「連帯」が真の外交政策を行わなかった点を確認することは重要だ。たしかに外国との関係づくりにかけてかなりの努力がなされた。幾度もの外国訪問を通じ、特にレフ・ワレサの外国旅行で、外国に「連帯」組合の活動を知らせようとの努力がなされた。しかし基本的には世界の諸民族にポーランド人への賞賛と援助を求めるだけで満足していた（実際、賞賛と援助の理由にはここにかかず、多くの人々が賞賛し援助した）。しかし、ポーランド人が旧来の対外関係、賞賛を欲し、誇り高いと同時に物乞いのでもある態度から脱却することが可能であった時期にそれができなかったのは、心安まらぬ事実である。

なぜ、ポーランド政府が西側に膨大な債務をかかえていた時に、ポーランド経済の合理化と“非ノメンクラトゥラ化”へ向けた国内・国外両面の努力を結合させるような政策を作る努力がなされなかったのか、考えることもできよう。ヤルゼルスキ將軍は1981年11月10日、ポーランドのIMF





彼ら〔当局〕と われわれ〔民衆〕

加盟を申請した時に、ポーランド経済政策への西側の監督を暗黙のうちに認めたのではなかったのか？ それはチャンスだった。しかしチャンスと認識されずに終わってしまった。「連帯」内の外国への関心が低かったのは事実である。私の知る限り、「週刊連帯」には外交問題を扱う欄はなかった。ポーランドの知識人たちも、少なくとも戒厳令以前は、当時西側で極めて重要な問題になっていた平和運動のような根本的テーマについて、何も言っていない。

つまり、第2次大戦後のポーランドにある政治的变化が起り、ポーランド人は“心理的に”西側に呼びかけるのをやめたが、それにかわる別の関係、共通の価値観だけでなく共通の利益と戦略にもとづく真の政治的関係を西側と結ばずに終わってしまったのだ。

今後そういう関係を結ぶためには、西側もまたイニシアティブを示さねばならない。われわれがシェイソン流の「むろん、何もしない」にとどまる限り、東西両人民の政治的協力、諸民族の共同社会としてのヨーロッパへの道はふさがれたままであり、ポーランド人は政治的ロマン主義を宣告されたままになるだろう。

では何をすればよいのか？ 具体的な指針を与えるのは困難だが、政治的ヨーロッパ領域とでも

いったものを作る環境が存在することを認識すべきだ。ヘルシンキ協定がその基礎を定めた（特に民族自決権に関する項目）。もしソ連が東欧人民民主主義諸国と西側の関係発展を阻止しようと思っても、東欧のつなぎとめに必要なだけの文化的、技術的、経済的資源はソ連にない。この環境の利用は、西欧のすべての国が対東欧関係運営のための長期的・具体的政治戦略を作りあげてはじめて可能である。だが最悪の状態になる恐れもある。なぜなら東欧の社会自衛運動（憲章77、K O R、サハロフ委員会、「連帯」）の成功でかき立てられた興奮がさめた後、西側の政治家たちの間に利己的姿勢や日和見主義的態度への復帰が見られるからである（特にイタリアのアンドレオッチ氏）。しかし西側世論は深くつき動かされており、東の社会を支援する共同戦略は多くの人々の願いにこたえることだろう。西側諸国政府全体の指導のもとでのそのような政策だけが、ポーランド人の政治的ロマン主義からの脱却を可能にする。なぜなら、その政策はポーランド人の政治的ロマン主義を生み出させる元凶としての状況を、変える目的を持つはずだからである。

〔訳：高橋初子〕

# 『平和と自由』運動設立宣言

Founding declaration of the Movement for "Peace and Freedom"  
Voice of Solidarity No.107, July 1985

【編集部注】 ポーランド初の自主的平和運動組織、『平和と自由』運動がクラブで結成された。この動きに対しワルシャワのグループが支持声明を発表したが、彼らは、宣誓を拒否して投獄された軍兵士の釈放を求めてワルシャワ郊外の教会でハンストを組織したグループでもある。『平和と自由』運動の結成は社会抵抗委員会（KOS）によりただちに西側平和運動（欧州核廃絶運動END）にも伝えられた。

末尾に名を記すわれわれは、とりわけ、ヨハネ・パウロ2世の平和に関する声明に触発され、本日、クラブにおいて『平和と自由』運動の設立を決議した。

1 運動の基本目的は、真の、いつわりのない平和の宣伝・普及、また、それを可能な限り多くのポーランド人に説くことである。ヨハネ・パウロ2世の1976年の平和声明においてこう語っている——「平和という言葉、それは人びとをなだめすかし、欺くスローガンとなってしまった」。今日、この言葉は、平和や協力、軍縮のスローガンを口にしなが、その実、世界中の自由な人びとから富を奪いとり、自分たちの自由を守ろうとする者たちによって広められている。この現象はついに、「平和」という言葉を発するすべての人びとの意図を道義的に疑い、政治的なものとする人たちの数がとめどなく増えつづける結果を招いた。これはポーランドにおいても同様である。これこそ、われわれが平和問題についてのあらゆる行動に道義的、政治的価値の復活を求める理由のすべてである。

2 諸国家、諸民族の政治生活に平和を確立するには、いかなる人びとの個人的自由をも効果的に保証することが先決条件である。抑圧とイデオロギー押しつけの体制、個人のプライバシーや表現の権利が奪われ、伝統的な政治的自由が抹殺されている体制には平和などありえない。したがって、共産主義者の支配するポーランドに平和はない。われわれは、個人の自由と国の自由の範囲を

拡大するために力の及ぶ限りのことをしたい。加えて、ポーランドに平和の訪れるチャンスをつくり出したい。

3 われわれは、自由を前提として平和を実現しようとする活動に献身しているポーランド国内および国外のすべての運動、団体、個人と協力したいと思う。その一方でわれわれは、今日の世界のおびただしい数の傲慢な平和論議、とりわけ、みずからの勝利のために暴力を道具に用いるイデオロギーを基礎に据えた者の平和論議に対しては非難をあげたい。イデオロギーによる暴力の特に顕著な例が、共産主義イデオロギーの名の下に企まれたアフガニスタン国民虐殺の国際テロルである。われわれに求められているのは、世界平和にとって危険きわまりない攻撃を目の前にしての沈黙をやめるといふ、初歩的な人間の連帯である。

われわれは、われわれと意図を同じくするすべての人びとに対して、われわれの努力を積極的に支持してくれるよう訴える。

エヴァ・ピク、マレク・ピク、ラドスワフ・フゲト、アンナ・クリフ、ボグダン・クリフ、マレク・コジェルスキ、ツェザリ・ミハルスキ、アガタ・ミハウェク、コンスタンティ・ミョドヴィチ、ヴォイチェフ・モアルスキ、ヤン・マリアン・ロキタ、ダリウシュ・ルビンスキ、バルバラ・シツ、ピョトル・スフィデル、ヤヌシュ・トリブス、クシシュトフ・ヴァルチック、アルトゥル・ヴァルスキ、クシシュトフ・ジドヴィチ

クラブ 1985年4月14日

\* \* \*

以下に名を記すわれわれは、1985年4月14日に設立された『平和と自由』運動に加わり、その設立宣言を受け入れる。

ヤツェク・チャプトヴィチ、ピョートル・ドンプロフスキ、ヤロスワフ・ドゥビエル、ロランド・クルック、マチュエイ・クーロン、ピョートル・ニェムチク、コンスタンティ・ラジヴィウ、アレクサンドラ・サラタ、ユゼフ・タラン、マレク・ボグルト、ラファエル・シチュルバ、グジェゴシュ・イルカ、イエジ・コラノフスキ、ツェザリ・オルロヴィチ

ワルシャワ 1985年5月2日

\* \* \*

末尾に名を記すわれわれ、マウォポルスカ地方組合活動家は、『平和と自由』運動への暖かな支持を表明する。それは、ヨハネ・パウロ2世の呼びかけた大いなる希望にきっかけを与えるものである。——「国際青年年である今年は、すべての若者が平和と公正のための仕事に加わり、その輪

が広がってゆく年となるでしょう」。そして、「若さと平和が手を携える年となるに違いありません」。そしてその輪はポーランドの若者のあいだにも見い出せるようになった。自由のもとにおける平和運動は、すべての若者の、とりわけ今日のポーランドに住む1人ひとりにとってなくてはならないもの、そしてさらに、大きな望みとなるはずである。これが、あなた方、『平和と自由』運動の創始者たちにわれわれが援助と協力、連帯を申し出る理由である。

スタニスワフ・ハンジリク、エドワード・ノヴァク（注：この2人はチェスワフ・タラガと共に、メデーのデモに加わったとして3カ月の禁固刑を受けた）

[訳：篠崎誠一]



## ENDアムステルダム大会に対する 社会抵抗委員会(KOS)のメッセージ

Message of KOS to END Convention in Amsterdam  
Uncensored Poland News Bulletin, No. 15/85, 25 July 85

ポーランドの社会抵抗委員会(KOS)は、END大会に対し心からのあいさつを送るとともに、実りある討論を期待します。平和と自由の問題に関するわれわれの立場は、さきのわれわれの声明〔本誌85年8/9月号12頁以下〕およびベルージャで開かれたENDの先の大会で署名された宣言に表現されるものと同じです。われわれはポーランドにおいて独立した公然たる平和運動——『自由と平和』運動——が創設されたことを心からうれしく

思っています。これは、ベルージャ宣言の理念と目標が実践的に実行された1例です。自由と平和のヨーロッパをめざすあなたがたの努力がすべて成功することを期待します。

ワルシャワ  
1985年6月29日  
社会抵抗委員会(KOS)

[訳：水谷 颯]

## 歴史における進歩——ギエレク体制の功罪——

伊 東 孝 之

歴史は繰返すというが、1970年代の始めと終りに起こった2つの政権交替ほど似た例は珍しいだろう。ある日労働者が食料品値上げに抗議して立ち上がる。しばらく政府が右往左往して倒れる。新しい政府が登場し、労働者に事態の改善を約束する。このように一見全く同じことの繰返しのように見えるが、実はそうではない。為政者も民衆も10年の間にそれなりに賢くなっているのである。

ここで2人の支配者、ゴムウカとギエレクを比べてみよう。2人とも労働者あがりであり、政治家として危機の時代に登場し、社会不安の渦の中で失脚したという点では似ている。しかし、類似点はその程度で尽きる。まず一方に困難な非合法活動、抵抗運動を生き抜いてきた革命家があり、他方に如才なく課題をこなしてきた党役員がある。一方に信念の人があれば、他方に機会の人がある。同じ実際主義に立ちながら一方はソ連に対して命を賭してまで自主独立路線を貫き、他方は卑屈なまでにソ連に追従した。

一方は国民の運命を舵取ることを天から授かった使命と感じ、他方は自分の地位が国民を物質的に満足させられるか否かにかかっていると信じた。一方は国民が我儘で言うことを聞かないと嘆いたが、他方は国民の顔を窺い、自分の評判を気にした。一方は孤高の人で、少数の腹心の同志を除いて自らの勢力を培わず、むしろ他の派閥を競合させて政局を運営するのが好んだ。他方は潜在的なライバルをことごとく追放し、側近で党の枢要ポストを固めるまで安心できなかった。

2人とも事実上無教養であったが、一方は頑迷で想像力に乏しく、他方は長い外国生活の影響もあって開明的で、批判にも耳を傾けた。最後に、一方は禁欲的で世間離れていたが、他方は贅沢を好み、下情に通じていた。古い同志の夫人が死んだとき、ゴムウカは秘書に5ズウォティ持たせ

て花を買いに走らせた。政務に没頭している間に花の相場にすっかり疎くなっていたのである。そんなとき秘書はそっと自分の金を足して花を届けたものである。他方、賄賂や縁故人事を好んだギエレクは、あらゆる財とサービスの相場に通じていた。要するに2人の間には、頑固一徹の貧乏親父とものわりのよい金持の叔父、創業者と雇われ経営者ほどの違いがあったのである。

つぎにギエレクの政策を主な分野別に見てみよう。まずイデオロギー面ではきわめて憶病で保守的であった。体制改革にはほとんど手をつけなかった。ゴムウカ時代と比べるとむしろ多くの退行さえあった。「社会主義へのポーランドの道」という標語が消え、代って社会主義一般が強調されるようになった。1976年の憲法改正に際しては、国名を「人民共和国」から「社会主義共和国」に改め、前文に「ソ連との永遠の友好」を書き込むことが提案された。こうしたソ連圏の公式教義への過剰忠誠は、内的確信からというよりもむしろその欠如から、ソ連への政治的配慮から来ていた。したがって、国民の強い抗議行動が起こるとすぐさま修正に応じたり、撤回したりしている。1976年以降の反体制派に対する寛容姿勢も、のちに述べる西側に対する外交的配慮とともに、こうした内的確信の欠如から来ていたといえよう。

つぎに、政局運営においては、党内における足場固めに精力を注いだ。党外に対してはむしろ柔軟な姿勢で臨んだ。共産党支配はいずれにせよ揺がないのだから、党内支配さえ固めれば安泰と考えたのかも知れない。いずれにせよ党内権力闘争においてまずゴムウカ派のクリシュコ、スプイハルスキら、ついでバルチザン派のモチャル、シュラフチツ、ケンバラ、さいごにこの間に台頭した実力者オルショフスキ、ヤロシェヴィチらをつぎつぎに追い落とし、代ってシロンスク・マフィアと

呼ばれる子飼いの部下を引き入れてほとんど独占的な地位を固めた。しかし、権力闘争の敗者の迫害はしなかった。ノメンクラトゥラ制を完成し、失脚した者も引き続き特権にあずからしめる慣行を確立したのは、他でもなくギエレクであった。

第3に、経済政策においては八方美人主義をとった。社会主義経済の難問の1つは、投資率を極大化するビルトイン・メカニズムが働くことである。これをいかに抑えるかが宿年の課題であったが、体制改革に関心のないギエレクははじめから断念していた。とすると、解決策はゴムウカがやったように国内原資に頼るか、つまり国民に耐乏生活を強いるか、それとも外資に頼るかの2つしかなかった。ギエレクは後者の道を選んだ。これは党官僚、経済官僚の投資欲を満足させ、しかも国民に耐乏生活を強いることなく済むという一石二鳥の政策であった。西側諸国の好景気とオイル・ショック後の余剰ドルに支えられて外資の導入はスムーズに進んだ。最初の5年間は投資ブームによって60%もの高成長が達成された。しかし、安易な金は非効率的な投資と不健全な社会風潮を誘発した。期待された生産効果が得られないまま、債務が増えていった。76年には償還額がIMFの設定した危機ラインである輸出代金の4分の1を突破した。それでも政府はなお借入れを続けた。80年には輸出代金のすべてをはたいても償還金を払えなくなった。こうしてポーランド経済は事実上破産したのである。

第4に、社会政策はギエレク政権の目玉商品であった。国民の審査を受けない政府は支配の正当性に確信が持たず、さまざまな人気取り政策に訴えようとする。とりわけ社会不安を産婆役として生まれた政権は、社会政策こそすべての鍵を握ると考えがちである。しかし、それは高いものにつく。ギエレクは、食料品・生活必需品価格の凍結、労働者の賃上げ、農民への社会保障の適用などに大きな努力を払った。1977年末には価格差補給金が国家予算の3分の1に達した。食料品価格の70%までが国家補助であった。なんとかこの重圧を免れようと、1976年に食料品価格の引上げを試みたが、労働者の抗議に遭って撤回を余儀なくされている。国民経済の観点からすればこれは明らかに不健全であって、いつか破綻することは目に見えていた。しかし、支配の正当性を欠く政権は蛇

に睨まれた蛙のように身動きがとれず、そのまま破局を迎えたのである。

最後に、外交政策もまた内における正当性の欠如を補う役割を果たした。ギエレクはいわゆるデタント外交の立役者の1人であったが、これは他でもなくヨーロッパにおける現状承認、つまり西側大国によるポーランドの共産党政権の承認を意味した。活発な招待外交、訪問外交によってギエレクは国民にこれ見よがしに、米、英、仏、西独のような西側主要国の指導者が自分をポーランドの支配者と認めていることを誇示した。デタント外交はまた経済政策の観点からも好ましいものであった。「西への開放」政策によって多くの西側の資本・技術がどっと国内に流れ込んだ。外交家としてのギエレクの名声は大いに高まり、70年代末にはたとえ何らかの国内的理由で失脚することがあるとしても国際的声望がそれを許さないだろうと思われたほどであった。

\* \* \*

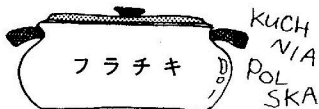
ギエレクの政策は結局弱縫策の寄せ集めに過ぎなかった。はじめのうちは何もかもうまく行くように見えた。1975年に引退しておれば、ギエレクは疑いもなく国民的英雄となっていただろう。ようやく後半になって綻びが見え始めた。それはまず経済政策において露呈した。経済政策の破綻とともに社会政策が維持できなくなった。国民の生活苦の前には、カーターやジスカールデスタンのような世界政治の大手との握手も何ら役に立たなかった。民衆が立ち上がったとき、ギエレクのカルタの家はあつという間に崩れ去った。

ギエレク政権の崩壊が体制の一般的危機につながったには理由がある。経済的にはあらゆる予備資源が使い果されていた。イデオロギー的には公式教義のあらゆる信憑性が失われていた。政治的には派閥ろっ断政策によって魅力あるオールタナティブが枯渇していた。他方でギエレクの政策はその意図せざる効果において市民社会の静かな成熟を促すものであった。「世界に向かって開かれた」ギエレク時代に国民の多くが直接異文化を体験し、お上とは違った物の見方を学んだ。また比較的寛容な治安政策のおかげで恐怖から解放され、お上の介入なしに相互に意見・情報を交換し、行動を組織することをおぼえたのである。



# 作ってみませんか ポーランド料理

工藤久代さんに聞く



秋になるとあたたかいスープが恋しくなるもの。今月は、ポーランド独自のモツ料理である「フラチキ Flaczki」をご紹介します。出来あがりには、モツと野菜入りの実だくさんのスープといった感じ。ここでは豚の白モツを使用しましたが、牛のモツがあればその方が良いとのこと。

## 材 料

豚の白モツ 約500g  
しょうが、にんにく 各1片  
スープストック

鶏ガラ1羽又はくず肉適宜、にんじん中1本、玉ネギ半個、セロリ1本、他に手近なくず野菜（長ネギの葉やパセリの茎など）、月桂樹の葉1枚、粒こしょう5〜6粒、肉形スープ3個

## 作り方

- ① スープストックを作る。スープ材料のうち玉ネギと固形スープ以外を2ℓ位の水とともになべに入れ、火にかける。玉ネギは網の上で中火で焼き、こげた外皮をスープのなべに入れ、残りはこげめがつく位まで焼いてまるごとなべに入れる（スープのあくを取るため）。煮立ってきたら火を弱め、あくをすくいながら1時間ほど煮て、最後に固形スープで味を整える。にんじん、セロリの葉、玉ネギ（こげていない所）をひきあげて取っておき、スープの方はこす。
- ② 熱湯をわかした中にモツを入れ、再度沸騰したらかきまぜてすぐザルにあげ、水洗いする。これを2度繰り返す、モツの臭みと油を抜く。その後、粗めのせん切りにしきざむ。
- ③ ①で取っておいたにんじんなどの野菜を細かくきざみ、②のモツとともにスープに入れ、しょうがのせん切りとつぶしたにんにくも加えて、弱めの中火で2〜3時間コトコトと煮る。途中、浮いてくるあくをとる。スープのにごりが消えてき

たら味をみて、好みに応じて塩味をつける。仕上げに乾燥マージョランを大きじ1杯入れて少し煮ると良い香りがつく。ポーランドでは水どき片栗粉でとろみをつけるが、工藤式は入れない。

④ 器によそって出すとき、しょうが汁をほんの少したらす。黒パンと一緒に出すと良い。

## 工藤久代さんのひとこと

フラチキはポーランドでは結婚式の後の宴などお祝い事の時に欠かせない料理。私もワルシャワで長男が結婚した時、10キロのモツで火鍋2つぶんのフラチキを作りました。とはいっても別に改まった料理ではなく、普段もよく食べます。フラチキのポイントは何といたっても臭みを消すしょうがですが、第2次大戦前はポーランドで売られていたしょうがが社会主義になってなくなってしまい、おかげで美味しいフラチキも食べられなくなった、とポーランド人は嘆いていました。

## 【豆知識】 ヴウオシチズナ

ポーランドでは、スープをとるとききまって入れる香りづけの野菜束があり、ヴウオシチズナと呼ばれます。葉つきにんじん1本、ボールねぎ（ポアロー、リーキともいう）半分、根セロリ8分の1、ペトルーシカ（図参照）1本をひもでくくったものです。ヴウオシチズナとは「イタリア文化、イタリア風」の意味。国王ジグムントI世スタールイ（在位1506〜1548）がイタリアから妃を迎えた時、多数のイタリア人とともに様々な野菜もポーランドにやってきました。古くはこうしたイタリア経由で到来した野菜の総称がヴウオシチズナでしたが、今は上記の4種をしぼったもの名になっています。



白い根にセリに似た葉がっついてる。

【2頁から続く】ピオトロフスキ神父が労組法と高等教育法の改訂を非難。

7月29日 9大学の学生代表がワルシャワ大学で記者会見、大学法改悪を非難し、これに抗議して国会選挙ボイコットを呼びかける。

7月30日 オルショフスキ外相がヘルシンキでハウ英国外相と40分間会議。

7月31日 新労組のミオドヴィナ議長は外国人記者会見で「ワレサはもはや競争相手ではない。「連帯」よりも知識人の方がはるかに手ごあい敵だ」と述べる。これに対しワレサ委員長は「新労組の力は数だけで實ではない。われわれが低姿勢をとっているのは、相手が戦車やこん棒、火器をもっているからだ。時がくれば24時間以内におれわれは以前よりも大きくなれる」と語る。

8月1日 ワルシャワ蜂起41周年のこの日、ミサを終えた数千人がワルシャワ市中心部をデモ、「ワレサ」、「連帯」の呼び声。ホヴォンスキ墓地のカチン事件記念碑前には「真実は勝利する」の旗が立てられる。

8月2日 国家再生愛国運動（PRON）が10月13日の国会選挙投票を呼びかける選挙宣言を発表。PAP通信によれば、ヤルゼルスキ首相の国連演説の内容についてアンケートの結果、国民は平和、安全保障、第三世界との見解の一致、国境不可侵、米国経済制裁非難、軍縮、アフリカ飢饉援助拡大等の強調を望んだという。ワシントンで米漁業協定調印。

8月3日 統一労働者党中央総会。10月13日の国会選挙戦略を討議。ヤルゼルスキ首相、「連帯」はもはや政治的脅威ではない、と述べる。

8月6日 10月13日の国会選挙のため総額9億9300万ズウォティのラジオ・テレビ・キャンペーンが決まる。

PRONは単独候補区50名の候補者名を公表（460議席中残りの40議席には同じPRON推薦の対立候補が立てられる）。うち22名は統一労働者党员、12名は公認の農民党および民主党员、16名は無党派。教会関係者はゼロ。ウルバン政府スポークスマンによれば、政治

因は現在231名。「連帯」筋によれば300名以上。

8月7日 獄中のW・フラシニェクらが政治囚待遇を要求して8月2日以来ハンスト中と伝えられる。

8月9日 ワレサ委員長の友人、グダンスクのH・ヤンコフスキ神父が地区検察庁の喚問を受ける。

8月12日 W・フラシニェクらハンスト中止。政治囚相互の接触が認められる。

8月13日 政府紙「ジェチボスポリタ」が新労組を資金抑制と生産性向上に貢献していないと非難。ワレサ委員長は南アのツツ大主教にメッセージを送り、アバルトヘイト反対の平和的闘争に連帯を表明。

8月14日 80年スト突入記念日のこの日、ワレサ委員長は造船所前の70年事件記念碑に献花。8月31日に「連帯」の将来戦略を発表の予定という。ラコフスキ副首相、「ポリティカ」誌に「ワレサはクローンらKORメンバーに裏切られた」と書く。

8月15日 ヤスナグラの聖母被昇天祭に20万人が参加。教会の指示（7月10日の項を参照）にもかかわらず多数の「連帯」旗。中には選挙ボイコットの呼びかけも。参加したS・ヤヴォルスキは、グレンプ大司教の説教について、「少なくとも投票しないよう呼びかけるべきだった」と語る。

8月16日 ヤルゼルスキ首相、オーストリアTVとのインタビューで、ソ連のゴルバチョフ新政権との関係は良好、と語る。

8月17日 官製労組全国組織OPZZのミオドヴィチ議長、グダンスク協定はいままお「社会的に有効」だが、われわれは不可能は要求しないと語る。

8月19日 政府紙「ジェチボスポリタ」によれば、85年1～7月の国営工業企業の生産伸び率は目標を50%下回ったという。PAP通信によれば、ポーランドからの輸出品の返品率が近年高まっているという。

8月20日 ウルバン政府スポークスマンによれば、OPZZが新しい社会協定の締結を提案しており、政府もその署名を検討中という。〔編：水谷 駿〕

## 編 集 後 記

☆前号に以下の誤植がありました。ここに訂正し、著者ならびに読者の方々にお詫び申し上げます。

4頁右欄下から9行目 政治→政府

6頁右欄上から24行目 会議→→会議は

8頁左欄下から4行目 非同質的→非同盟的

8頁右欄上から21行目 「政府は、……」の前に次の文が脱落。「西欧や北アメリカでは、市民的自由

を適当に享受しているが、」

9頁左欄上から23行目 事件と指紋→条件と構造

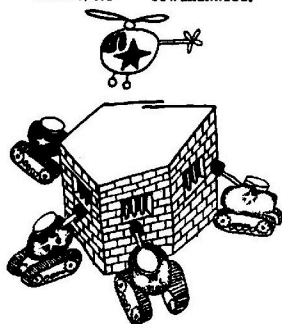
35頁右欄下から13行目 たしか→したたか

☆10月13日の国会選挙に暫定調整委員会（TKK）

はボイコットを呼びかけていますが、ワレサ委員長はこれに消極的と伝えられます。詳しい資料がまだ入らないので、この問題は次号でとりあげる予定。

☆長く暑い夏でした。その分秋の訪れは早いようです。事務局一同、張り切って仕事再開。 (み)

GWARANCJA SUWERENNOŚCI



国家主権の保障——ポーランド国土をかたどった監獄のまわりを、ソ連のヘリコプターと戦車がかたまっている。

## '85年秋期開講!! マヤコフスキー学院

ロシア語

コース	開講	曜日	講師
文芸・読物 基礎コース	10/21	月	谷垣 恵子 浦 雅春
中級読物 コース	10/22	火	坂本 博夫 近 藤 昌夫
文学鑑賞 I	10/25	金	江川 卓良 鴻 英
文学鑑賞 II	10/23	水	原長 卓也 堀 光男

ポーランド語

コース	開講	曜日	講師
初級前期 コース	10/24	木	長 興 容 工 藤 幸雄
初級後期 コース	10/25	金	坂 倉 千鶴
会話コース	10/21	月	ロムアルド・フシチャ

●授業開始/10月21日～10月25日 ●期間/6ヵ月

●時間/PM 6:30～9:00

●授業料/入学申込金5,000円ロシア語・ポーランド語30,000円

●問合せ/中野区東中野1-41-5 TEL 362-8772 マヤコフスキー学院

発行所・ポーランド資料センター

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一国ビル3F  
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)